様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月　 ９ 日現在

機関番号：１３１０１
研究種目：基盤研究(A)（一般）
研究期間：2013～2016
課題番号：２５２４４０３３

研究課題名（和文）新出簡牘資料による漢魏交替期の地域社会と地方行政システムに関する総合的研究

研究課題名（英文）A comprehensive study of a regional society and a local administration system between Han and Wei dynasties by using newly excavated wooden and bamboo tablets

研究代表者
関尾　史郎（SEKIO, Shiro）

新潟大学・人文社会・教育科学系・フェロー

研究者番号：７０１７９３３１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　29,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は，次の二点である．第一は，中国各地で出土している後漢から魏晋時代の簡牘の特質を明らかにすること，第二は，その簡牘を用いて，この時代の地域社会と地方行政システムを解明することである．湖南省の長沙市で出土した長沙呉簡を主たる調査・研究の対象としたが，木簡の大型化，それと関連して地方の官府内部での白文書の広汎な利用などが明らかになった．また各種の簿籍が毎年のように作成されていた．官府の吏員は文書や簿籍の作成とその点検作業などに従事していた．

研究成果の概要（英文）：A purpose of this study is the following. At first we want to make clear a distinctive feature of wooden and bamboo tablets between the Later Han and Wei-Jin dynasties excavated from every corner of China. Secondly we intend to make clear a regional society and a local administration system of this period by using wooden and bamboo tablets. “Changsha-Wujian”（長沙呉簡）was selected as a main object of an investigation and a study. Consecently it was became clear that wooden and bamboo tablets gradually became big and in connection with this, “Bei-manuscripts”（白文書）were comprehensively used in local government office. Also we can know that many different kinds of register were prepared almost every year. Servants of local government office were engaged in preparation and inspection of manuscripts and registers.

研究分野：アジア史

キーワード：中国古代史　漢魏交替期　簡牘　地域社会　地方行政システム　長沙呉簡

１．研究開始当初の背景

(1)　代表者はこれまで一貫して「出土資料に依拠した中国古代社会の研究」をテーマに掲げて研究活動を展開してきた．この出土資料には，敦煌文献やトゥルファン文書など紙の文字資料／簡牘に書写された文字資料にとどまらず，鎮墓瓶／磚画・壁画など広範囲に及んでいる．

本研究ではそのうち，湖南省長沙市の走馬楼で出土した三国呉の時代の簡牘すなわち長沙呉簡をはじめ，中国各地で出土している簡牘資料に注目し，これを素材として活用することによって，「地域」について多角的に検討することにした．

(2)　簡牘資料に注目したのは，蔡倫が新しい紙を提供して紀元後 2 世紀初頭以降の各地の遺跡からも近年，多くの簡牘資料が出土しており，少なくとも地方においては，公私の両面において，簡牘が一般的に用いられていたことが確かめられるからである．

また簡牘資料の出土地は特定の地域に限定されることなく，南方の湖南省から，三国時代以降，都も置かれた江蘇省・南京，さらには西北の甘粛省など広汎な範囲に及んでおり，地域を越えた比較研究も可能であるというメリットがある．

２．研究の目的

(1)　本研究はこれまでの経験と成果を踏まえて，前世紀末から今世紀初頭にかけて中国各地で出土した 2～4 世紀の簡牘資料に関して，情報を整理してその特質を明らかにする作業を一つの中心に据える．

(2)　またその簡牘資料を駆使しながら，漢魏交替期（おおよそ 2～4 世紀）の地域社会と，その地域社会を取りまいていた地方行政システムについて，研究史上の重要な論点を中心に解明をめざすものである．

地域社会については，家族形態と村落構造，地方行政システムについては，租税制度，戸籍制度，郷里制度，倉庫制度，および身分制度などの運営実態について，新しい理解と知見を提供する．

３．研究の方法

(1)　主要な資料群である長沙呉簡については，既に調査経験があるので，実見調査を行ない，重要と思われる簡牘の観察・計測・撮影を試みた．これ以外にも，できるだけ実見することを心がけた．その結果，長沙簡牘博物館はもとより，南越王宮博物館（広東省広州市，南越国の簡牘），郴州市博物館（湖南省郴州市，呉簡・西晉簡），湖南省文物考古研究所（湖南省長沙市，益陽出土簡），長沙市文物考古研究所（同，後漢簡），湖南大学岳麓書院（同，岳麓秦簡），六朝博物館（江蘇省南京市，呉簡・西晉簡），中国古陶文明博物館（北京市，西晉簡），甘粛省文物考古研究所（甘粛省蘭州市，西晉簡）など各地で諸時代の簡牘資料を実見することができた．このうち，長沙簡牘博物館で計測できた長沙呉簡については，データベースを作成して研究組織のメンバーで共有した．

(2)　長沙呉簡の写真・釈文を収めた大型図録本『長沙走馬楼三国呉簡 竹簡』は，研究期間中に竹簡柒と竹簡捌の 2 巻が公刊されたので，研究組織のメンバーが中心となり，分担しながらデータベースを作成した．このデータベースを活用することにより，研究活動が大いに進捗した．

(3)　研究組織のメンバーが中心となっている長沙呉簡研究会の例会を開催し，研究成果と情報の共有を計ったが，研究期間中に，東京を会場として例会を 14 回開催することができた．

また期間中，2015 年 9 月 20 日には東京でシンポジウムを開催し，研究代表者の趣旨説明と 4 本の個別報告を行ない，それに対して，日本・中国・韓国・台湾から参加した 4 人のコメンテーターから外部評価を得た．

この他，2016 年 8 月に長沙で開催された「紀念走馬楼三国呉簡発現二十周年長沙簡牘研究国際学術研討会」には，本研究組織の母体である長沙呉簡研究会が協弁単位として名を連ね，研究代表者と研究分担者・連携研究者があわせて 6 本のペーパーを提出し，連携研究者が開会挨拶を行なった．また 2 人の海外共同研究者も報告を行なったほか，大会総括も担当した．この国際学会を通じて中国・台湾・韓国・アメリカなどの研究者に対して成果を公表し，また意見交換を通じて，研究成果のバージョンアップを図ることができた．

４．研究成果

(1)　全体を通じて，簡牘が長期かつ広域に用いられていたことがあらためて確認できた．墓中に埋納される喪葬用文物に関しては，5 世紀初頭まで降るものさえあることがわかったが，井戸の遺構から出土した簡牘の文書には 4 世紀初頭（郴州西晉簡）のものがあり，墓中から出土した簡牘の文書にも 313 年のものがあった（臨沢西晉簡）．後者の釈読はまだ定説がないが，地方の官府で簡牘が用いられていた可能性はすこぶる高い．313 年とは，朝鮮半島にあった西晉の楽浪・帯方両郡が高句麗や百済に陥落した年次でもあり，この両郡でも簡牘が用いられていたと考えられる．とすれば，高句麗や百済は，簡牘を用いた文書行政制度を継承したはずである．これは韓国から出土している百済や新羅の簡牘の起源を考える上に重要な点である．

なおこれら半島での簡牘の使用例だが，近年日本列島の木簡との比較研究が盛んに行なわれており，その結果半島と列島の木簡の使用例が類似していることが指摘されてい

る．6 世紀以降のこの当時，中国では既に簡牘から紙への移行が完了しており，簡牘を使った比較検討は不可能だが，半島と列島では木簡が使われて運用されていた制度自体は中国起源であり，敦煌文献やトゥルファン文書から，同じような制度が同時代の中国で行なわれていたことがわかる．木簡（簡牘）比較の有効性の限界と言えよう．

(2)　長沙出土の後漢簡が，それ以前，例えば西北地方から出土した前漢簡よりも大型化していることは，角谷常子が指摘しているが，この傾向は後漢から呉簡や西晉簡にも認められる．このような簡の大型化が意味しているところは，木と竹，簡と牘，単独簡と編綴簡の使い分けの原則の弛緩ないしは消滅といった問題（長沙呉簡には，木牘と竹牘の混用，単独簡の木牘と編綴簡の竹簡の混用，竹簡と木簡の混用などを指摘できる）ともからめて今後検討が求められよう．

その場合，紙の出現と普及により，簡材が大型化したという仮説もありえよう．

なお 3 世紀後半の楼蘭では，木簡と紙が併用されていたが，用途が截然と区別されていたわけではなく，簿籍に使われた簡牘があったことも明らかになった．紙と簡牘の使い分けにも再検討が求められることになった（ただし楼蘭では，簡材の不足という事情から，簡の大型化という現象は進行しなかったものと思われる）．

(3)　後漢簡以降の大型化という現象の背景には，地方官府の機構の大規模化・複雑化という事情もあったのではないか．そのため機構内部での文書のやりとりが頻繁に行なわれるようになり，上行文書としての白文書が定着していった．これに対しては官府の長官が教により指示を出すことが常態化していった．従来から上行文書に常用された「敢言之」文書は，同一の機構内よりも，上位の機構に宛てて発出される形式であった．長沙呉簡の場合，君教牘と言われる木牘や竹牘が出土しているが，これは提出された白文書（簿籍に附された送り状を含む）に添えて県令（臨湘國相）に渡されたものと考えられる．

(4)　簡牘の時代の戸籍様の名籍である呉簡中の吏民簿は，3 世紀前半の戸口把握の制度と実態を示している．ただし郷・里ごとに作成された吏民簿は，郷ごとに，また同じ郷でも作成年次ごとに様式が多様である．このことは，吏民簿が，紙の時代の戸籍にとどまらず，資簿や差科簿などに相当する簿籍なども含めた総称だったためと考えられる．

また作成プロセスは，里の責任者である里魁が原本を作成し，それを郷で集約し，当該郷担当の勧農掾が配下の吏に分担させて書き写させたと考えられる．勧農掾は県吏であり，複数の郷を担当することになっていた．

(5)　前漢時代に行なわれていた表裏分割式の刻歯木簡は，後漢時代以降確認されない．その代わりであろうか，左右分割式の合同券書とも言うべき券が多用された．楼蘭からも出土例があるが，呉簡にも，木牘・大木簡・木簡・竹簡などに券がある．これは券書という性格と同時に，公文書（平行文書）や簿籍という複合的な機能を有していた．なお左右分割式のみならず，左中右という 3 分割式のものがあったことが，湖南省益陽市から出土した「参弁券」から裏付けられた．

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１3 件）


① 關尾　史郎（蘇俊林訳），長沙走馬楼出土呉簡所見臨湘地域社会的特質，長沙簡牘博物館編『長沙簡帛研究国際学術研討会論文集』，査読有，長沙：岳麓書院，2017 年 8 月刊行予定．

② 關尾　史郎，出土史料よりみた魏晉・「五胡」時代の教，藤田勝久・關尾編『簡牘が描く中国古代の政治と社会』，査読無，汲古書院，2017 年 7 月刊行予定．

③ 關尾　史郎，長沙呉簡吏民簿の研究―「嘉禾六（二三七）年広成郷吏民簿」の復元と分析―」（上），人文科学研究，査読無，第 137 輯，2015 年，縦 27-98 頁．

④ 町田　隆吉，甘粛・臨沢出土の西晉簡と孫氏一族―臨沢出土西晉簡研究（一）―，桜美林論考人文研究，査読無，第 7 号，2016 年，137-148 頁．

⑤ 町田　隆吉，河西出土魏晉・五胡十六国時代漢語文献の基礎的整理　補遺（一），西北出土文献研究，査読無，第 11 号，2013 年，51-64 頁．

⑥ 伊藤　敏雄，長沙呉簡中的朱痕和“中”字再考，長沙簡牘博物館編『長沙簡帛研究国際学術研討会論文集』，査読有，長沙：岳麓書院，2017 年 8 月刊行予定．

⑦ 伊藤　敏雄，楼蘭出土漢文文字資料中の簿籍と公文書について―残紙の簿籍と公文書を中心に―，土肥義和・気賀沢保規編『敦煌・吐魯番文書の世界とその時代』，査読無，東京：東洋文庫，2017 年，1-20 頁．

⑧ 伊藤　敏雄，長沙呉簡中的「叩頭死罪白」文書木牘（補訂版），長沙簡牘博物館編『走馬楼呉簡研究論文精選』下冊，査読無，長沙：岳麓書院，2016 年，578-593 頁．

⑨ 鷲尾　祐子，嘉禾四年～六年吏民簿所見夫婦年齢差，長沙簡牘博物館編『長沙簡帛研究国際学術研討会論文集』，査読有，長沙：岳麓書院，2017 年 8 月刊行予定.

⑩ 鷲尾　祐子，嘉禾四年～六年（235-237）長沙の婚姻慣行：婚姻と年齢，東洋学報，査読有，第 97 巻第 1 号，2015 年，横 111-134 頁.

⑪ 阿部　幸信，“ 吏潘籵李珠市布 ” 考，長沙簡牘博物館編『長沙簡帛研究国際学術研討会論文集』，査読有，長沙：岳麓書院，2017 年 8 月刊行予定.

⑫ 安部　聡一郎，長沙走馬楼三国呉簡中所見 “ 郷 ” 与 “ 丘 ” 対応関係的再研究，長沙簡牘博物館編『長沙簡帛研究国際学術研討会論文集』，査読有，長沙：岳麓書院，2017 年 8 月刊行予定.

⑬ 窪添　慶文，日本的長沙呉簡研究，長沙簡牘博物館編『長沙簡帛研究国際学術研討会論文集』，査読有，長沙：岳麓書院，2017 年 8 月刊行予定.

〔学会発表〕（計７件）

① 關尾　史郎，出土史料からみた「教」，韓国木簡学会例会，2016 年 4 月 8 日，ソウル市（韓国）（招待講演）.

② 關尾　史郎，従出土史料看〈教〉――自長沙呉簡到吐魯番文書，中国魏晋南北朝史学会第 11 届年会暨国際学術研討会，2014 年 10 月 12～15 日，北京市（中国）（ペーパー提出）.

③ 伊藤　敏雄，長沙呉簡における坡塘管理について，中国水利史研究会 2016 年度大会，2016 年 11 月 6 日，大阪教育大学天王寺キャンパス（大阪市）（研究発表）.

④ 伊藤　敏雄，長沙呉簡中的《叩頭死罪白》文書木牘，中国魏晋南北朝史学会第 11 届年会暨国際学術研討会，2014 年 10 月 12～15 日，北京市（中国）（研究発表）

⑤ 角谷　常子，中国古代の「書記官」，東洋史研究会 2014 年度大会，2014 年 11 月 3 日，京都大学文学部（京都市）（研究発表）.

⑥ 阿部　幸信，“ 吏潘籵李珠市布 ”小考，（中国語），第 3 届簡帛学国際学術研討会暨謝桂華先生《漢晋簡牘論叢》出版座談会，2015 年 11 月 7 日，桂林市（中国）（研究発表）.

⑦ 安部聡一郎，臨湘県の地理的環境と走馬楼呉簡，魏晋南北朝史学会 2014 年度大会，2014 年 9 月 13 日，日本女子大学目白キャンパス（東京都）（研究発表）.

〔図書〕（計４件）

① 關尾　史郎，伊藤　敏雄，窪添　慶文編『湖南出土簡牘とその社会』，汲古書院，2015 年，250+vii 頁.

② 角谷　常子編『東アジア木簡学のために』，汲古書院，2014 年，305+vi 頁.

③ 髙村　武幸『秦漢簡牘史料研究』，汲古書院，2015 年，364+vi+*21* 頁.

④ 谷口　建速『長沙走馬楼呉簡の研究：倉庫関連簿よりみる孫呉政権の地方財政』，早稲田大学出版部，2016 年，362+x 頁.

〔その他〕

ホームページ等

① 關尾　史郎，「關尾史郎のブログ」
http://sekio516.exblog.jp

② 鷲尾　祐子，資料集：三世紀の長沙における吏民の世帯―走馬楼呉簡吏民簿の戸の復原―，
https://publication.aa-ken.jp/

６．研究組織

(1)研究代表者
関尾　史郎（SEKIO Shiro）
新潟大学・人文社会･教育科学系・フェロー
研究者番号：７０１７９３３１

(2)研究分担者
伊藤　敏雄（ITO Toshio）
大阪教育大学・教育学部・教授
研究者番号：００１８４６７２

(3)研究分担者
角谷　常子（SUMIYA Tuneko）
奈良大学・文学部・教授
研究者番号：００２８００３２

(4)研究分担者
安部　聡一郎（ABE Soichiro）
金沢大学・歴史言語文化学系・准教授
研究者番号：１０３４５６４７

(5)研究分担者
永田　拓治（NAGATA Takuji）
阪南大学・国際コミュニケーション学部・准教授
研究者番号：４０６２３３９３

(6)研究分担者
町田　隆吉（MACHIDA Takayoshi）
桜美林大学・人文学系・教授
研究者番号：５０３１６９２３

(7)研究分担者
阿部　幸信（ABE Yukinobu）
中央大学・文学部・教授
研究者番号：６０３４６７３１

(8)研究分担者
鷲尾　祐子（WASHIO Yuko）
立命館大学・政策科学部・非常勤講師
研究者番号：６０６４２３４５

(9)研究分担者
髙村　武幸（TAKAMURA Takeyuki）
明治大学・文学部・准教授
研究者番号：９０５７１５４７

(10)連携研究者
窪添　慶文（KUBOZOE Yoshihumi）
公益財団法人東洋文庫・研究部・専任研究員
研究者番号：４００１１３８２

(11)連携研究者
中林　隆之（NAKABAYASHI Takayuki）
新潟大学・人文社会･教育科学系・教授
研究者番号：３０３８２０２１

(12)連携研究者
佐川　英治（SAGAWA Eiji）
東京大学・大学院人文社会系研究科・准教授
研究者番号：００３４３２８６

(13)研究協力者
谷口　建速（TANIGUCHI Takehaya）
早稲田大学本庄高等学院・非常勤講師

(14)研究協力者
石原　遼平（ISHIHARA Ryohei）
東京大学・大学院人文社会系研究科・博士生

(15)研究協力者
市来　弘志（ICHIKI Hiroshi）
中国・陝西師範大学・外国語学院・外籍教師
（2013 年 11 月～2014 年 3 月）

(16)研究協力者
北村　永（KITAMURA Haruka）
美術史研究者
（2013 年 11 月～2014 年 3 月）

(17)研究協力者
田　衛衛（TIEN Weiwei）
中国・北京大学・歴史学系・博士生
（2013 年 11 月～2014 年 3 月）

(18)研究協力者
蘇　俊林（SU Junlin）
中国・中国社会科学院歴史研究所・博士後
（2015 年 4 月～2016 年 3 月）

(19)研究協力者
李　周炫（LEE Joohyun）
韓国・ソウル大学校・人文大学・博士生
（2016 年 10 月～2017 年 3 月）